

九百三十三
卷六

史遷記序

東西遊記序

史遷の流と遊るる名の大川を據ると
まの勢は平安土の政費にてほし
うの勢は平安土の政費にてほし

あつたは旧記をよみしは味地の感あり
あつたは旧記をよみしは味地の感あり

あつたは旧記をよみしは味地の感あり
あつたは旧記をよみしは味地の感あり



微言を以て世人に希むるを以て其の
一に其の人の心此君子人此もあに
をさし自の心を以て其の山川に
乃其身を以て死にせられたり
あくを命に志すも此の最の
志すも其の心を以て其の
い志すも其の心を以て其の
ふ死に志すも其の心を以て其の
の志すも其の心を以て其の

其の心を以て其の心を以て其の
志すも其の心を以て其の
乃其身を以て死にせられたり
あくを命に志すも此の最の
志すも其の心を以て其の
い志すも其の心を以て其の
ふ死に志すも其の心を以て其の
の志すも其の心を以て其の

此の川に舟の末を寄るに墨は埴火の
 のをみよとちまはるに記しつて
 こぢんらんくはり等は花をみよ
 一堵君よりせ侍るハ序一も
 澤

果世子寄書

松田也



東遊記後編目録

○ 第一之卷

○ 壺石塚

○ 盲層

○ 葡萄嶺

○ 二之卷

○ 龍燈

○ 三馬屋

○ 駿河の名

○ 新瀉

○ 狐の義理

○ 三本木

○ 三本木

○ 三本木

○ 三本木

○ 三本木

○ 三本木

○ 三本木

○綿木
○蜂珠

三之卷

○四五六谷

○北極星

○黃鐘調

○善光寺

四之卷

○熊野御前

○松嶋

○漢文帝

○大魚

五之卷

○手取川風雪

○飛根城跡

○洞山

○氣候

○湫先

○龍鱗

○養軒詩

○齋藤五郎兵衛

○登龍

○箒木

○諏訪湖

○五徳云の巻

○羽州鬼

○舞樂

○戸隠山

○塔影

○床下の夢

○舍利漬

○廣徳寺門

○名山論

○地氣

東遊記後編目録畢

東遊記後編卷之一

毒れ石ゆふ

南谿子著

名多るの毒の石が、奥州仙臺の東小多賀城の古跡にあり
 即仙臺より松崎の間にありて街道より往小田丁四拾
 間入り込所あり南都の墨屋松井某享保中小乃志々の
 石と立てて明白なり昔蝦夷王化小服を以奥州も大津ハ
 其種類の有ありて行々ともわらわらと見ゆ
 且將軍の遺蹟ありて是は鎮光らるるまは法身將軍とい
 ひまは右西と稱守府といひまは賀城四達の花よりて守府
 天平寶字六年大野東人といふ人あり賀城の傍に此石

東遊記後編卷之一

或建四方の路程記一見雲真人小おれと書し今小おれ
ハ千年小餘も古物に傳へる字傳ふ古雅として度海を換替
百読も稱美しあり多賀城修理後數百年とて秀衡法
少將軍たりし時を平泉小居住してけ城に廢し壺碑を
出さく豫倉殿の和名ありしは名のこぼさるる懸けり
を母伊達政宗より三代目吉村中將の附けを也方くと為求
られし今この碑は土中より掘り出ると云れ給の附くふ
る多しこのことこの碑は今年年の後まゝの文字の白き
石かゝりも換ざりしてくは是は元々新派ふ思議の
之碑の傳自然石中より文をよと順らる方計年とんごころ

このふ六尺厚カホ三尺甚石あり外に堂ありて是は度海
四方に換子してくのこられ小換へり石かゝり赤き
大はるるものさうやもあらけ碑の事ハ世上の人
志る所もさばらけくはるる又或人のつひに壺六つ
がと漢字ふらありは音烟むく街中の碑は壺碑と
云と爾雅の注やまありと云いゝあゝん又東の壺碑と
いふのありしははいあや城より七八十里計東小の方
の舟邊地の近在小壺村といふありし村小壺中といふ
山ありてけしは石碑あり村民を碑に敬し社と建て
是とあり氏神として姓古よりあり小開く事なり

碑面文字あり上ノ方小大字東ノ字が形付たりと云
こゝ文ハいりたるのるん土民を教して石摺をふすなり
とゆりしに故小志る人びしを年好事の士此碑以摺る侍人
こゝと形も極を方の事取れ人と稀少ていざせふ
弘くす余も此地以住事下りやうも此を遠達城の
河は頻りなりしと取意ぎこしやと一取村もいりす
今小字あるを城の碑高と云大字あるは是小対する
東の碑ありきり又技本系法捕物長のおふるやや付
く河のおちふありときくえをせの中流にひく河の又
ありの山系小みちのハ奥にしくもかとはゆりまの

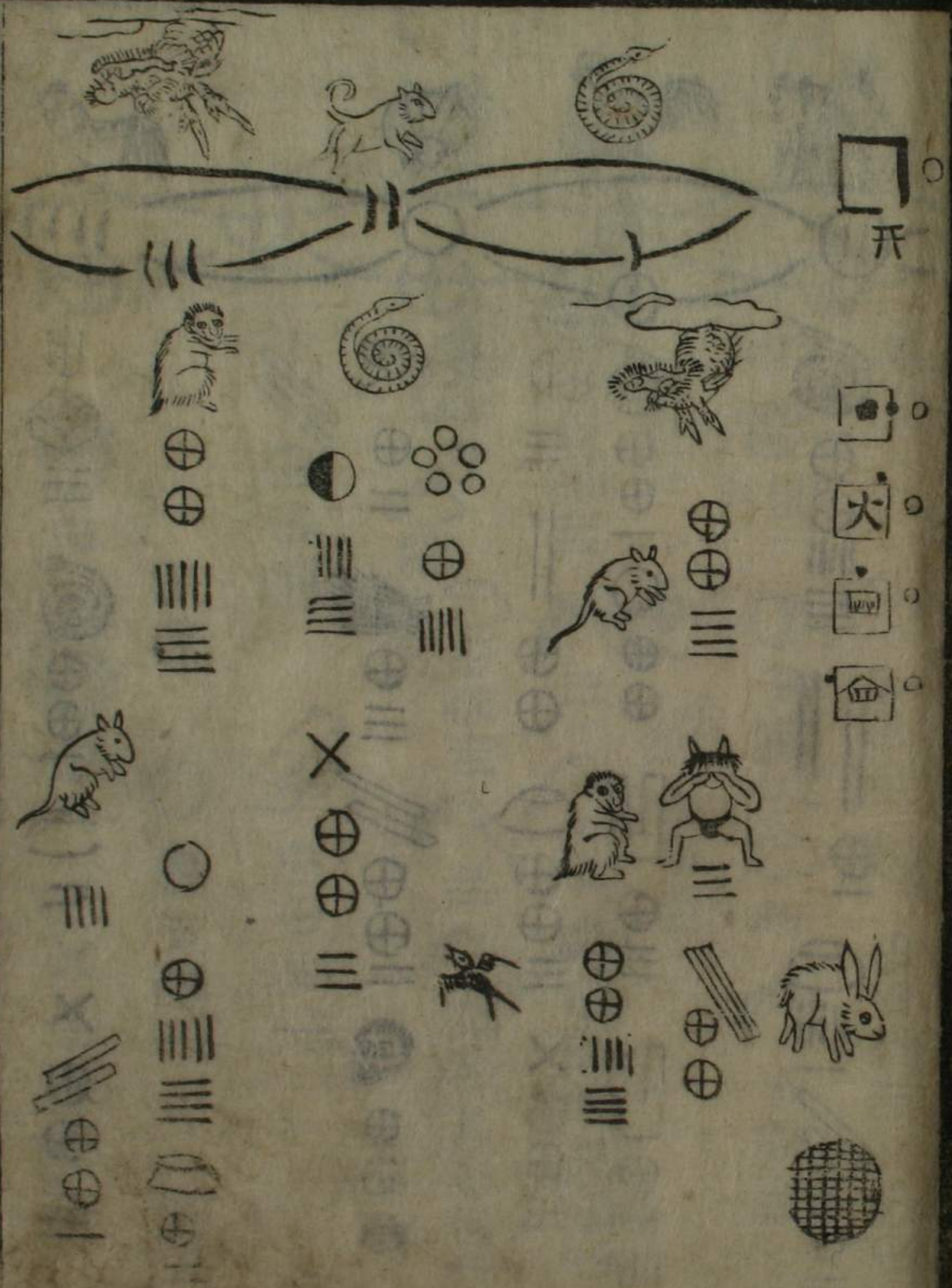
るあまの候所あまのきハ是等も東の毒碑 小やと云る

書語






天地開きしころまのこゝ今の所やと太平なる事ありド
西ハ鬼界屋敷の傍より東ハ奥州の外に流るる号令の
屋敷るありし住古ハ屋敷の傍ハ屋敷國と云ふ其の
やえ奥州もまの概夷人の領地なりしや狩をこぼして夷
人の使取ありしと云ふと南部津波迄の地名ハ垂名は
外に漢通りの村の名ありタツにホロツキ内ニツハ外ニツハイ
ベツウテツなどいふあり又田名部の方中ラコベラニシ
リヤあとに外村に在るの名ありハ此等ハ是皆概夷國に今



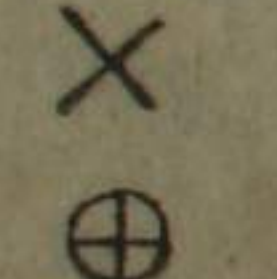

此てもウテツなるの邊ハ風俗もや概夫小終して津波の
 人も彼等ハエツ後といひて、やゝむろし余もあふウテツ邊
 小限もむ南於津波邊の村氏もたつるハエツ後あるべし早
 王化小服して風俗言語も改まるる所を先程より日本人の
 こゝろにいひ居る事とてさるる故小禮義文華のいふこ
 同けざるハ尤の事と南於の邊鄙ハいらはとてに志す
 して盲磨といふのありと我々余り通訳をう街道ハ
 あゝ終どもやうまうとてさるる又般若心経をうとめ
 ら磨の法まで通とらるる云々圖たのこゝろ


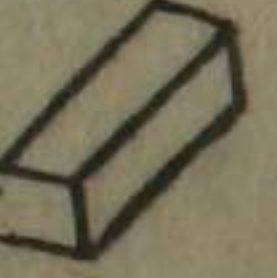
盲磨




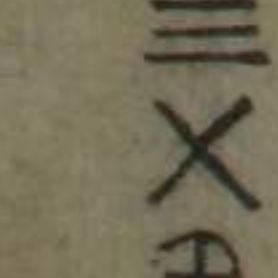
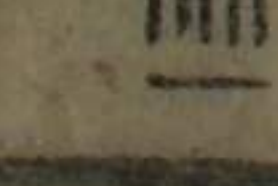







一後


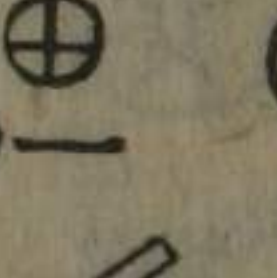
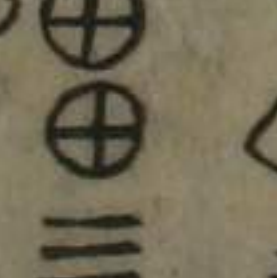

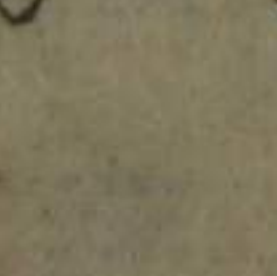








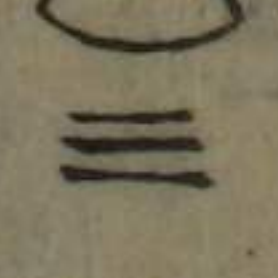

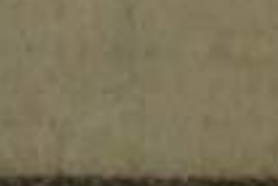














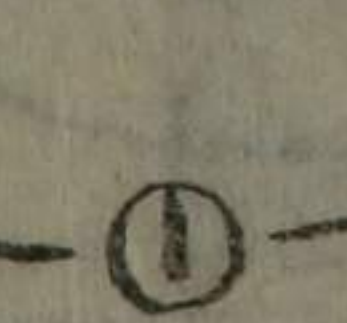
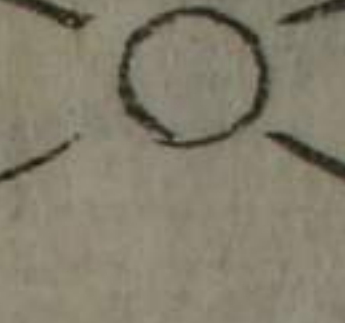
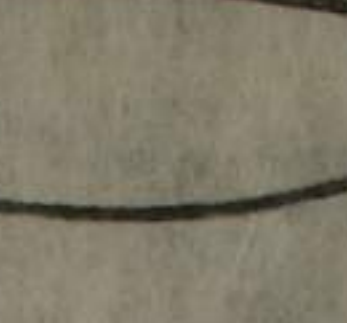


















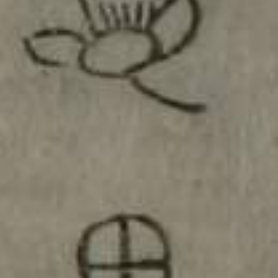
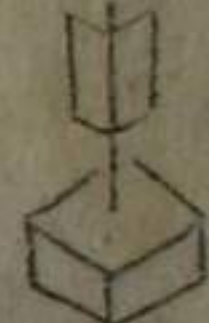







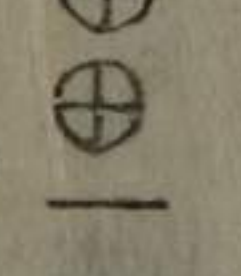
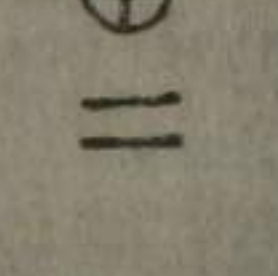
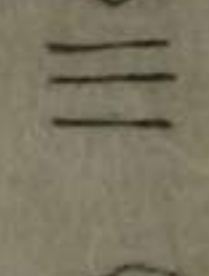







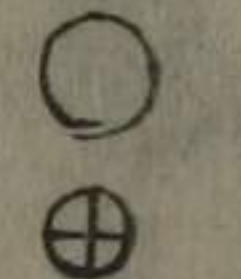








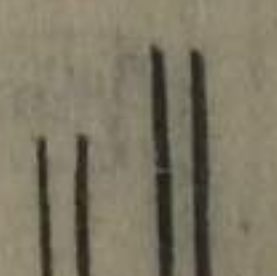
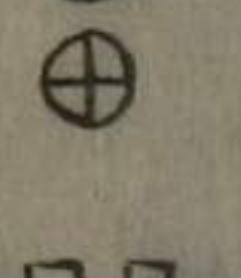
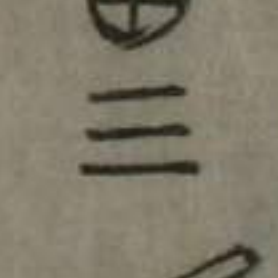
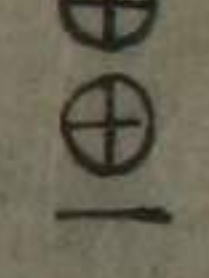





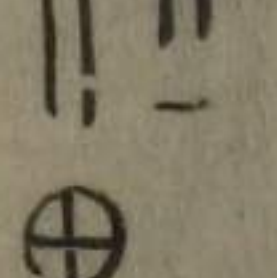
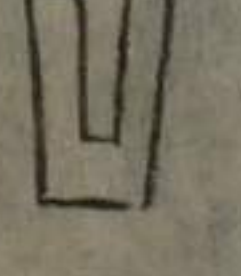
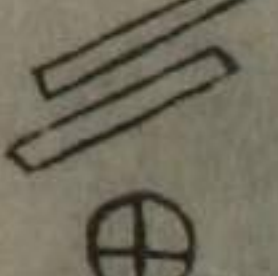






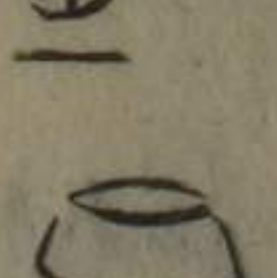
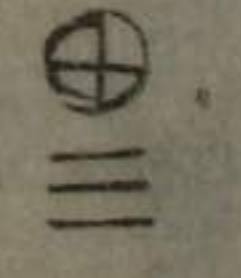
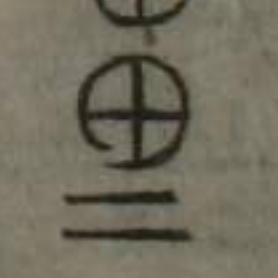







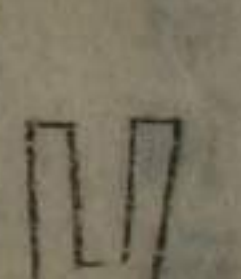







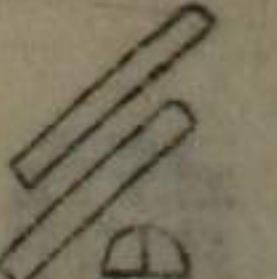
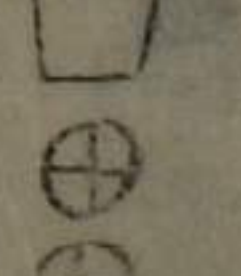
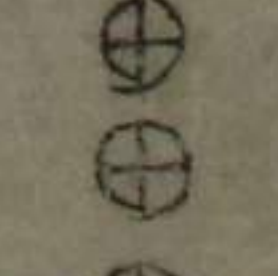
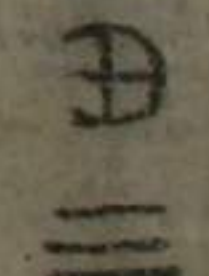





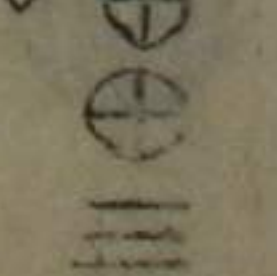

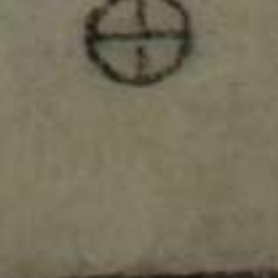






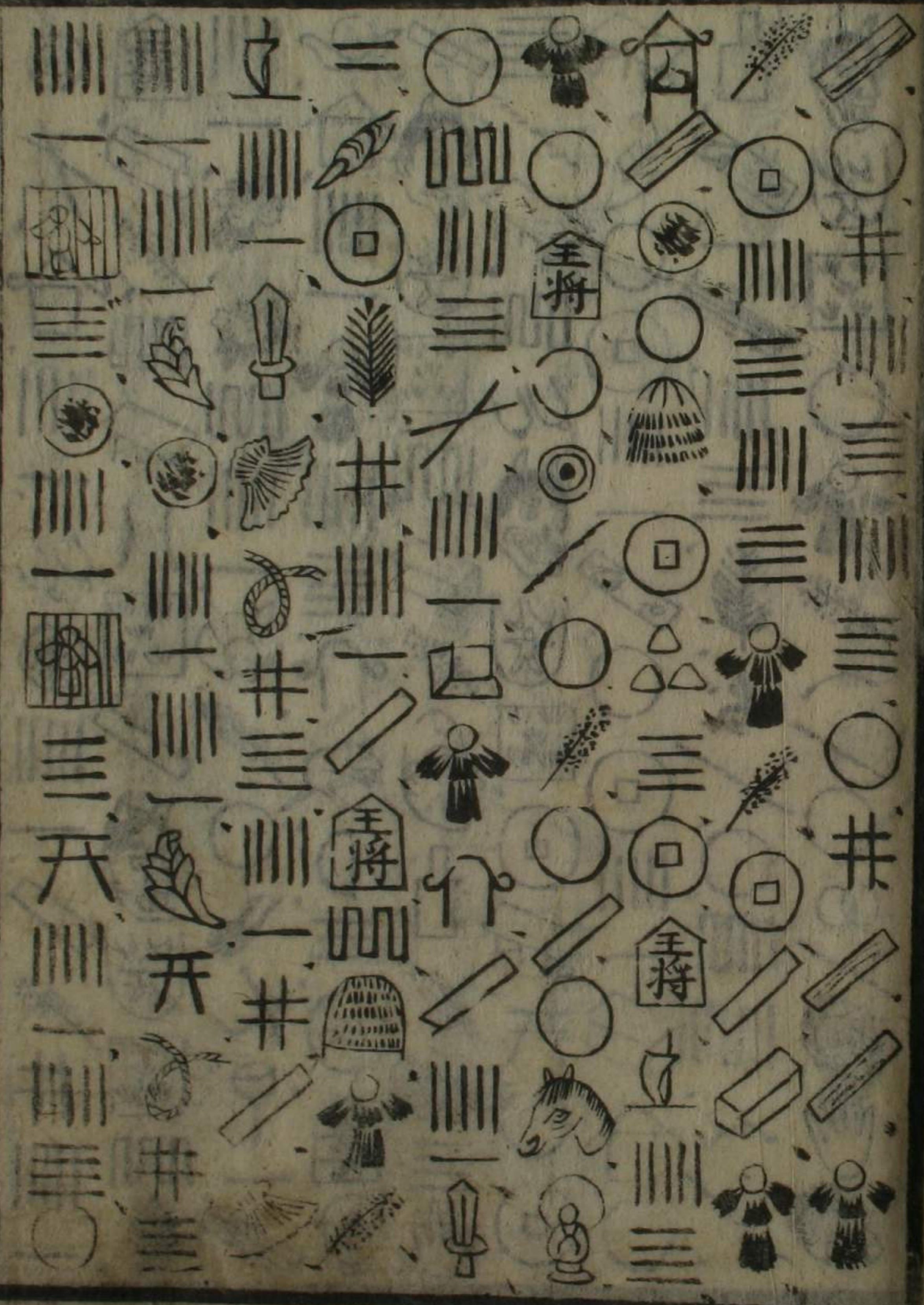





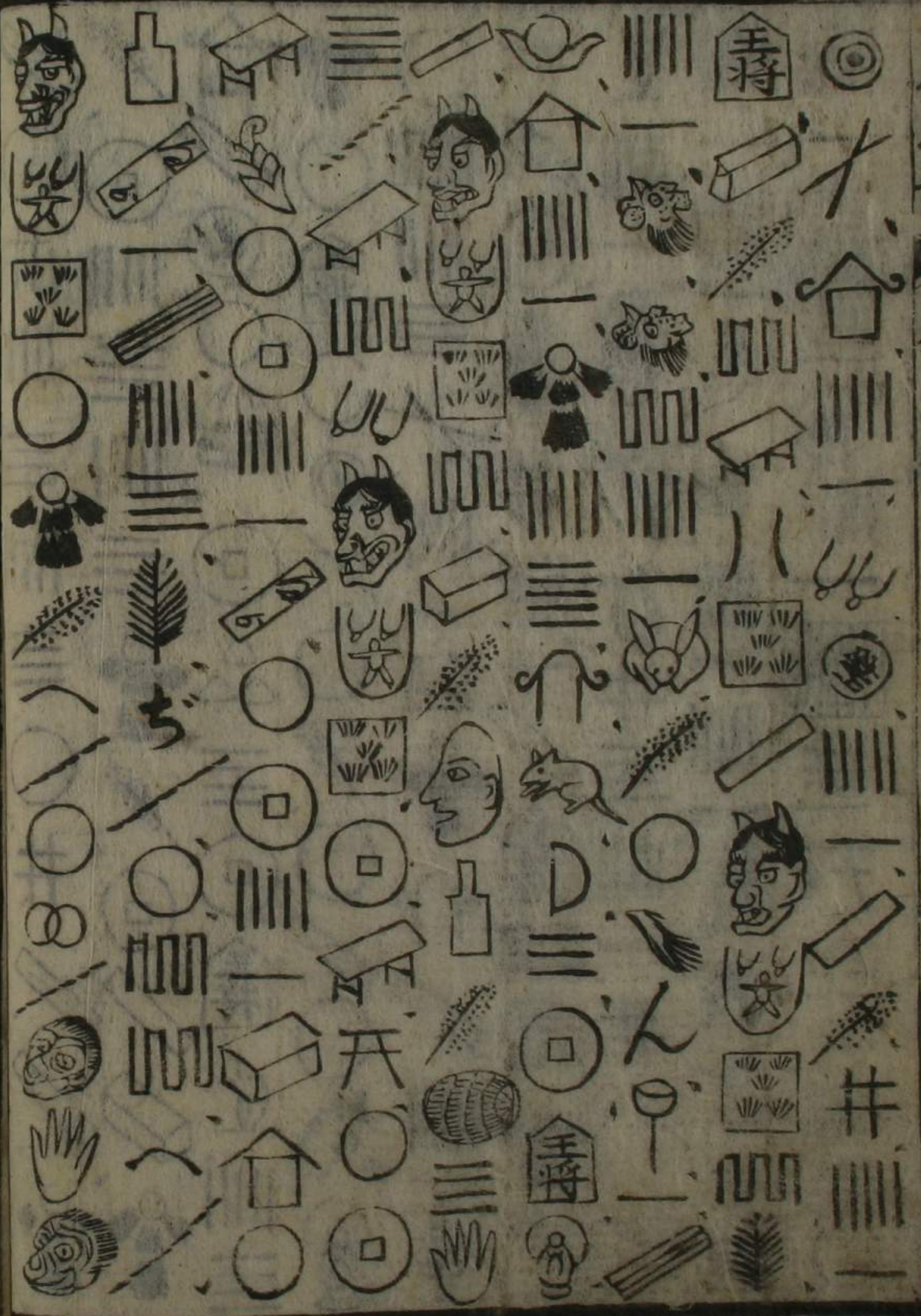







盲心經
メクラシキキ





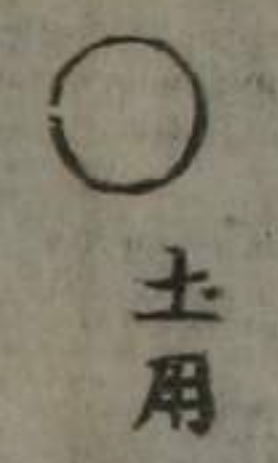
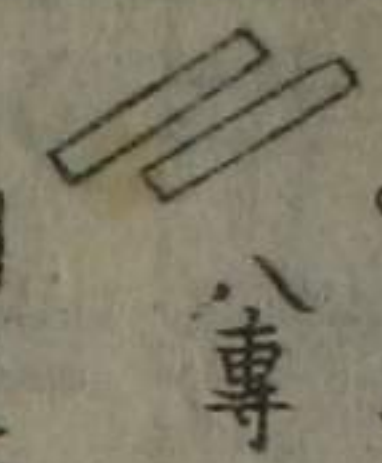
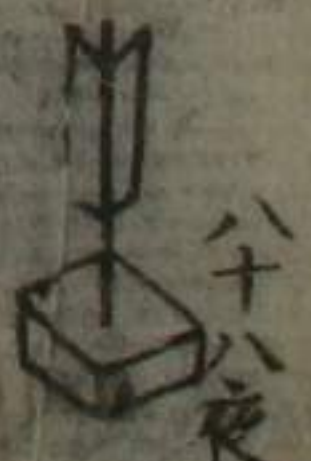
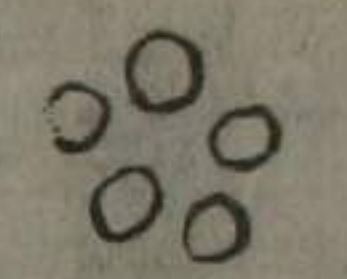
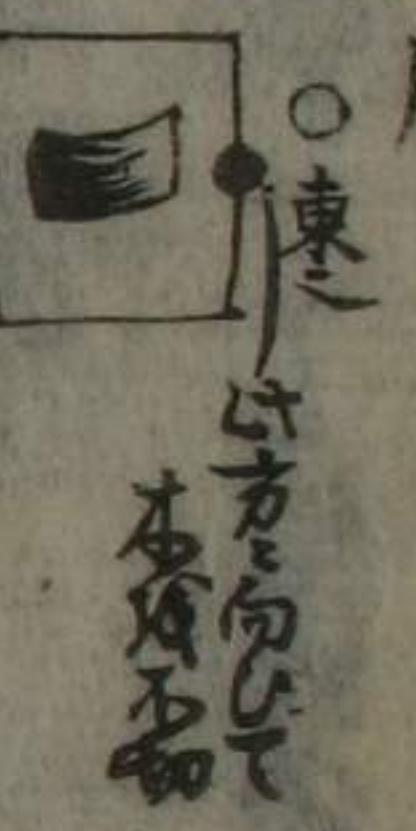
田向



右の... 龍... 蛇... 田向... 龍... 蛇... 田向... 龍... 蛇... 田向... 龍... 蛇... 田向...
 点一絡さるるあしは解あり

七
七

注解



種トキヨリ



正月小

朔日 十五日

朔日 五日

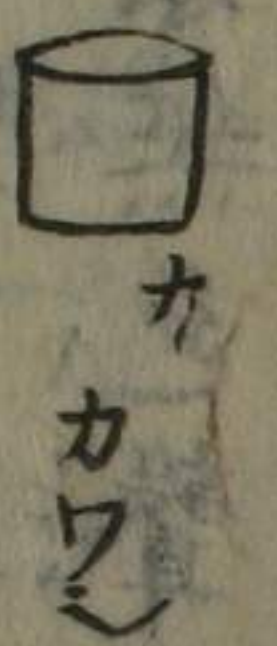
朔日 十日



十五日

二十日

心經注解



天



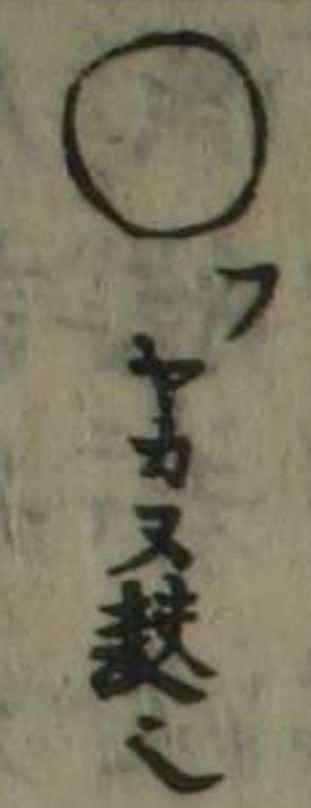
九



焚



焚



クモト云草アリ

般若

孕

田

行人如比

指

鋸ナリ

節分

彼岸

社日

庚申

八十八夜

朔日 二月大

朔日

朔日 五日

朔日 十日

朔日 十五日

朔日 二十日

心經原文

摩訶般若波羅密多心經觀自在菩薩行
 深般若波羅密多時照見五蘊皆空度一
 切苦厄舍利子色不異空空不異色色即
 是空空即是色受想行識亦復如是舍利
 子是諸法空相不生不滅不垢不淨不增
 不减是故空中無色無受想行色無眼耳
 鼻舌身意無色聲香味觸法無眼界乃至
 無意識界無無明亦無無明盡乃至無老

死亦無老死盡無苦集滅道無智亦無得
 以無所得故菩提薩埵依般若波羅密多
 故心無罣礙無罣礙故無有恐怖遠離一
 切顛倒夢想究竟涅槃三世諸佛依般若
 波羅密多故得阿耨多羅三藐三菩提故
 知般若波羅密多是大神咒大明咒是無
 等等咒能除一切苦真實不虛故說般若
 波羅密多咒即說咒曰
 羯諦羯諦波羅羯諦波羅僧羯諦菩提薩

婆訶 般若心經

た心經の平文へ引合をて法へ一見等のまはりて依
名又さといはるるは南部盛恩の城下より七
八十里と西にあつらるる田山村に在る松山一の邊鄙
かま減小古の結繩の物ととゆへ一蝦夷地と云ふ
文字無く木小刻と付く是等とてさるるは是等の
ゆへとてさるるあまの事國との文華の務あつらるる
一九洲の中心は假名いささささるるはさるる

時を信はは浅きもの二首と多智ふすくち風とていなる
さるる事さひせす一危角日本あつらるる在るさるる

菊 菊嶺雪ニ歩ス

天の丙午二月十八日金城後園平林とつ所所立ま早稲
一雪路にまより武里余とて村上の城下とむは雨の回を
あく是より馬城傳んとてふ是より先は雪路とるはま
雜一とつひてふは雪とて二月末のまはまはくは雪を
さるるはとてさるる是のまはるるは雨のまはるるは
石自中から鹿かくハツとるる一と疑ひはるるせん
形くあまの村とよりそ里猿沢の跡のまはるるは

とくしより又まき屋敷の所といふ驛まで中食すふよまの
老翁のふまき屋敷より先八雲を渡りしうたもすく
しうと今有ハは西亦者一ふたといふ若水社といふ合を
くつまご日中おとむるふをよといふ老翁のいふおと
めいとていひといふるべし増ふと氣を晴らけは先の葡萄の
澤の八代小武里の道なるはハツと白波と云ハはつと
あご笑ひと云ふふ後小老翁のいふまごの塩の町のお難
まごり若水社と云ふ山河道流三面のおをよとて村誰と
ま道計ハ人のいふまごり一社とありて圓東とありしうら
おとまごり先ハ八雲を渡りしうたもすくを考ひていふ

こて先とて目さうまごり迷ひつれおとハ雲と増ぬきて川の中人
お入り揚げしと若の中ふあふ或ハ切巻をの取よいわり
雲家と云ふと海と云ふと多にござして若水と云ふお助ハ
合うと昔海の中にある所なりといふとまごり若水と云ふ
池澤より田んぼの中に入るてお例は車扱十段お及
つらとまごりは極雪を渡りしうたは川のほとりといふと若水
合ふと後今事なりかといふ事若水とて後小武里の湯と
まごりが目さふまごりやうと葡萄の藤おまごりといふ若水
後小老翁の頼お後塩の町お一布一子おのちも若水と
うら小案内お云ふといふてまごり云ふと若水と云ふ

すしと後悔一にやう先意あてて付くと後ひ湯と海
るひ物ふあてりや氣と防がふ是より血の脈々お夥る記
りへ八今日夜で濡のさあ入りし時付たりしに
ハ血と凍りりらび痛とをえええええ今湯ふ入り
火ふあてめく袖と血のちあがりし此の痕今中
くおまろおけ夜はしとらふ今日のあざにがくのぞ
ぬりの道とあおれおぬらうにそ北地中一の雪飛たし
はらうる難儀とあえん早天雪凍くゆきさるお業南
者城やとひ紙きべと用さし十九のすさぬら
ゆらうまお事角を先ふき道とつとぐ湯ふすしお湯り

て救文の候雪山白狐とてゆきさるてく樹あるん次
はまがやお前たるまはるたどくしらすおとたつくと
あ入りのむととぬくしと程多し頂ふむきりけりよ矢伏ぬ
神とて神祠ありしゆらとら乃懐かたあやきさゆ
すくぬえゆ神祠の後お窟穴ありぬ神の位ありふ
かりとひい窟穴のころ方とあさるさ後壁あり窟穴
高廿三丈餘ありと云はる窟のさふ古本の松敷十平
ありふと松の指中しく岩のさふありしをを藤小唐
画とるるごとく并跪はれり雪ハ一とらりて後ありを
氣後やとてまらり中村中次荒川小股小淵おの時



松堂藤雅則寫



東遊記 卷之一

成るる小滝雪も中々もり色もきけ小のどらなるが
横きる雪を先いりてゆるく杖丈小餘まらう村小
て葉肉中いり小葉もはより香又ありゆりや
踏ぬけと落る年暇のどく一担尾中といふおのおふ
く大なる時とやうまらうりるおのりまは險阻して下
るきおびり葉肉の先と何色の節をひらんとたけ
あうら雪ふまらうて道の谷底へ落ぬ余は小葉まき
尖うーぐい俵とてそ葉肉の人のあもなうこそあは
し雪かーやうふあうふはまきとて足踏付て物小
りらハ何事ういふんといひてそ葉肉とやうにまき

はるる落る中と飛とて葉の向ら小を断りりもこまひ
落るらー小雪小埋おる本乃稍へ落かをまきまらうり
まきいりておるまらうらとてまのいりてまきまらうり
とまきおとぬけおまきと枝下の谷粒百何の切着りまき
中うらーらまきとて又まきまらうらまらうりまらうり
ハ枝はらうらういりまきとらうらカ字小持店より一本の
指まきまらうりゆりまき又まきとてまらうらまらうり
ハ背の旁道松小あう落てゆく余は稍小かを居るる月
葉影ハ早先小落りりしとまきまらうりまらうりまらうり
まきまらうりまらうりまらうりまらうりまらうりまらうり

小舟の櫓小舟の櫓はまのこくく小舟をて落るは是小舟の
 一のハ大木と根こき小舟を打つ悪風毎らうる時ハ人をもと
 と小舟をけさる小舟も由あるをみぢん小舟碎かるやん小舟は
 といは春の末小舟を中より陽氣おる小舟の船丈橋する
 音の下よりゆりみけく山より下を落る小舟の勢の小舟の
 下れくは遠の雲一團小舟を落る川と谷と埋むみ人
 るの御言又ハ人考り小舟もなごき落る事ありとく小舟の
 る者身死とるのなごき救す丈の音小埋すこと雲階を
 すことハ知る人もなごき二ツハ花のくろなるくみり法ハ小舟を
 小舟居たりしが今日の氣をいふいふとも肝をゆるる事す

扱け表宿のま小け花も雪のりやと同はけ先小本股握英
 川やどい所は小險阻ありて雪も亦深くと云扱ハいづをん付
 小險阻ありて雪も又深くと云扱ハいづをん付けあは雪は
 まく遠るをんやあどをくをいふやみく亭も小舟をり小
 亭も重乃のやあは是よりあ北小岩川といふああり是ハあふ
 間道あり是ハ海をまきばは雪をてかーはと雪もをん
 小舟雪の中なり扱け蒲葎ハ羽越の界小て山のるを
 音中ありは四附とも旅人の経儀をるふ之此葎若葎盗
 とあり旅人ありて殺害し今とは来のくをる所也

東遊記後編卷之一

廣東省城...

廣東省城...

廣東省城...

廣東省城...

廣東省城...

廣東省城...

廣東省城...

廣東省城...

廣東省城...

廣東省城...

